

路問ふほどのこと

——啄木と智恵子——

宇野憲治

今、私の手元に明治四十三年十一月一日発行の『文章世界』（第五卷第十四号）がある。田山花袋の編集になり、博文館から発行されたものである。この雑誌には、島崎藤村の『枕の草紙』と日本の女性」という随筆が載っており、この文章を読みたいがために、わざわざ東京の某古書店から取り寄せたものである。そして、同雑誌には、藤村をはじめとして、正宗白鳥・岩野泡鳴・相馬御風・窪田空穂などの文章も載っている。これらの作家たちに交って石川啄木の名が、ふと私の目にとまった。「路問ふほどのこと」と題して短歌が二十首ばかり載っていた。どんな内容の歌なのだろうかと、多少の興味と関心を持って読みはじめた。読むに従って、こころにときめきを覚えるようになって来た。啄木にはめずらしい恋の歌だったからである。

路問ふほどのこと

石川啄木

頬はほの寒さむき流りゅう離りの旅たびの人ひととして路問みちとふほどのこと言いひしのみ
何時いつなりけむ夢ゆめにふと聞ききてうれしかりしその聲こゑもあはれ長ながく聞きかざり

ひややかに清き大理石に春の日のしづかに照るはかかる思ひならむ
世のなかの明るさのみを吸ふごとく黒き瞳は今も目にあり
さりげなく言ひし言葉はさりげなく君も聞きつらむそれだけのこと
馬鈴薯の花咲くころとなれりけり君もこの花を好きたまふらむ
忘れをればひよつとした事が思出の種にまたなる忘れかねつも
山の子の山を思ふがごとくにもかなしき時は君を思へり
君に似し姿を街に見るとき心のをどりをあはれと思へ
しみじみと物うち語る友もあれ君のことなど語り出でなむ
いそがしき生活のなかの時折の物思ひをは誰がためにする
時として君を思へば安かりし心にはかに騒ぐかなしき
眞白なるラムプの笠の瑕のごと流泊の記憶消しがたきかな
死ぬまでに一度逢はむと言ひやらば君もかすかに領くらむか
長き文三年のうちに三度來ぬ我の書きしは四度にかあらむ
石狩の都のそとの君が家林檎の花の散りてやあらむ

以上の十六首である。

*

明治四十三年といえば、『一握の砂』（明43・12・1）が出版された年でもあり、長男真一が誕生し、死んだ年（明43・10・4）明43・10・27）でもある。真一の死については、「夜おそく／＼とめ先よりかへり来て／今死

にしてふ児を抱けるかな」をはじめとする八首の歌が、『一握の砂』巻末に載っている。また、巻頭には、次のような啄木の猷辭的な一文がある。

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同國の友文學士花明金田一京助君

この集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものの如し。従つて兩君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡兒眞一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の藥餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著 者

路問ふほどのこと

こんなことなどを思い巡らしながら、手元にある『文章世界』の発行年月日を再確認する。確かに明治四十三年十一月一日の発行である。この雑誌の「原稿募集」の記事をみて見る。一月二十発行の『文章世界』のための「原稿募集」記事があり、「締切期日十二月二十日正午」とある。締切日はちょうど一カ月前なのである。とすると、この雑誌の原稿締切日は十月一日ということになる。このことから察するに、「路問ふほどのこと」の一連の恋の歌が詠まれたのは、九月末頃ということになる。啄木は細めに日記を書き残しているが、この時期（明43・5〜明43・12）に限り日記がない。啄木年譜等から考えるに、この時期は妻節子の出産直前の時であり、今か今かと、誕

生を待ち望んでいた時でもあったろう。長男真一は十月四日に誕生しているのだから。一方、節子にとっては一番苦しい時でもあったろう。にもかかわらず、啄木は、これら一連の「君」を思う恋の歌を詠んでいる。「夢にふと聞きてうれしかりし」・「山の子の山を思ふがごとくにもかなしき時は君を思へり」・「君に似し姿を街に見るときの心をどりを」・「時折の物思ひをば誰がためにする」・「君を思へば安かりし心にはかに騒ぐ」等と、まさに恋のときめきを覚えるような歌ばかりなのである。妻節子が一番苦しい時にもかかわらず、なぜ啄木はこのような恋の歌を詠んだのだろうか。ここに啄木の詩人的資質がはっきりと現われていると私は思う。このことについては後で触れる。

*

さて、これら一連の歌に詠まれている「石狩の都のそとの君」とは一体誰れのことなのであろうか。この「君」とは、橘智恵子のことなのである。智恵子と啄木との出会いは明治四十年六月十二日である。この日啄木は、代用教員として、函館区立弥生尋常小学校に採用されたのである。智恵子は既にこの小学校の教員であった。

六月十一日予は区立弥生尋常小学校代用教員の辞令を得たり、翌日より予は生れて二回目の代用教員生活に入れり月給は三級上俸乃ち十二円なりき、職員室には十五名の職員あり校長は大竹敬造氏なりき、児童は千百名を超えたり

職員室の光景は亦少なからず予をして観察する所多からしめき、十五名のうち七名は男にして八名は女教員なりき、予は具さに所謂女教員生活を観察したり、予はすべての学年に教へて見たり

とある。この「八名」の「女教員」の中に橘智恵子はいたのである。「女教員生活を観察したり」ともある。しかし、啄木の教員生活は思わぬ出来事により終止符をうつことになる。その出来事とは、明治四十年八月二十五日夜

に起こった函館の大火である。

(大火) 八月二十五日

此夜や十時半東川町に火を失し、折柄の猛しき山背の風のため、曉にいたる六時間にして函館全市の三分の二をやけり、学校も新聞社も皆やけぬ、友並木君の家もまた焼けぬ、予が家も危かりしが漸くにしてまぬかれたり、

とある。代用教員であった啄木にとつては、生活の糧がなくなり、今後の目途も立たなくなってしまった。「この日(八月三十日)より大竹校長宅なる弥生尋常小学校仮事務所に出務する事となれり、学校の諸帳簿殆んど灰となり」といった有様であった。代用教員という身分不安定な状態であった啄木は、将来のことを考え、この日、新しい職を求めんとして、「明日札幌にかへるべき向井君に履歴書をかいて依頼」しているのである。函館を去るにあたってか、函館弥生尋常小学校の同僚たちを惜しむかのごとく、九月四日の日記には、教師ひとりひとりの寸評が記されている。

その中で、女教師たちのことに關して、

女教師連も亦面白し。遠山いし君は背高き奥様にて煙草をのみ、日向操君は三十近くしての独身者、悲しくも色青く瘦せたり。女子大学卒業したりといふ疋田君は豚の如く肥り熊の如き目を有し、一番快活にして一番「女学生」といふ馬鹿臭い経験に慣れたり。森山けん君は黒ン坊にして、渡部きくゑ君は肉体の一塊なり。世の中にこれ程厭な女は滅多にあらざるべし。高橋すゑ君は春愁の女にして、橘智恵君は真直に立てる鹿ノ子百合なるべし。

とある。年令順に記しているのであろうが、啄木独自の観察眼から、それぞれの人物の性格なり容貌なりを正確に

把えているように思われる。橘智恵（以下橘智恵子と記す）の名前が日記に見えるのは、この時が初めてであるが、二ヶ月余の間の「女教員生活の観察」（明40・6・12）の結果とも言うべき記述であるところからすると、この二ヶ月余の間、啄木が一番の興味関心と好意とをもって接していたのは、何と云っても橘智恵子ということになる。

*

橘智恵子の経歴について簡単に紹介しておく。

明治三二年（一八八九）六月一日〜大正一一年（一九二二）一月一日。戸籍智恵。札幌生まれ。北海道札幌郡札幌村一四番地に橘農園を営む橘仁の長女。明治三三年三月札幌村公立藤古尋常小学校卒業。明治三五年三月札幌女子高等小学校三年修業、この年五月二〇日北海道庁立札幌高等女学校二年に編入された。三六年四月一三日給費生となり明治三八年三月二一日卒業。その後引き続き補修科に在学、翌三九年三月二七日修了と同時に函館区立弥生尋常高等小学校訓導として赴任した。

橘智恵子はその後教職を辞して札幌の実家に帰り、明治四三年五月良縁を得て空知郡北村に嫁いだ。新郎は兄儀一の友人で北村謹という若き牧場主であった。彼女はこの牧場で平和で倅せな日々を送り六人の子供をもうけたが、産褥熱のため三四歳の若さで死んだ。『石川啄木の手帖』△国文学 昭53・6増Vより）

とある。啄木が代用教員として弥生尋常小学校に勤めるようになったのが明治四十年であるから、この時智恵子十九歳、啄木二十二歳であった。智恵子は年下とはいえ正教員、啄木は日本一の代用教員と自称するものの代用教員の身分、まぶしく近寄り難い思いの二ヶ月余であったことと思われる。

*

明治四十年七月七日に妻子を、八月初めに母と妹を函館に呼び寄せ、やっと生活が安定しはじめ、周囲の様子も

見えはじめようとしたそのとき、函館は大火に見まわれる。この大火が智恵子と啄木の別れの原因ともなる。啄木は八月三十日、友人の向井君に次の新しい就職口を頼んでいる。その返事が九月八日に来る。日記に、「この日札幌なる向井君より北門新報校正係に口ありとのたより来る」とある。さっそく辞表を出しに大竹校長宅に行く。「座に橘女史あり、札幌の話をきけり」（九月十一日）とある。橘智恵子の郷里は札幌なのである。その翌日十二日、「朝のうちに学校の方の予が責任ある仕事を済し、ひとり杖を曳いて、いひ難き名残を函館に惜しみぬ。橘女史を訪ふて相語る二時間余。我が心は今いと静かにして、然も云ひ難き樂しみを覚ゆ」とある。校務を済ませ、ひとり智恵子の寄宿先を訪問し、こころより別れを告げているのである。この時、啄木の詩集『あこがれ』（明38・5・3）を智恵子に贈っており、献辭に「わかれにのぞみて、橘女史に捧ぐ 四十年九月十一日 著者」と記している。この一件だけからしても、啄木の智恵子に対する切なる思いが伝わってくる。この時の話の内容については、日記に記されていないので具体的にはわからないが、「云ひ難き樂しみを覚ゆ」とあることから、札幌出身の智恵子と札幌での再会等についても、話が及んだのではないかと想像される。その日の日記の次の箇所にも、

恋する者をして恋せしめよ。怒る者をして怒らしめよ、笑ふ者をして笑はしめよ、悲しくして泣き、楽しくして笑ふ、これ至理なり、止まるべくして止まり、去るべくして去る。この身この心唯自然の力の動くに委して又何の私心なし。

と、かなり昂ぶった調子で、なすがままになるように、その思いを記している。また、「さりげなく言ひし言葉はさりげなく君も聞きつらむそれだけのこと」という歌をも考え合わせると、啄木の智恵子に対する思いは、他の同僚の女教師たちに比べて、かなり強いものであったことがわかる。しかし、妻子ある啄木の身にとっては、智恵子は手に触れ難い存在であったことも事実である。そのことが、ますます、啄木のこころの中に智恵子の面影をあざ

やかに刻印することになるのである。

後の小奴・植木貞子等の女性と啄木との付合いに比べると、天と地・聖と俗ほどの大きな落差がみてとれるのである。それだけに、啄木のこころの奥所で育っていた智恵子への思慕は、帰えろうとして帰えり得ない¹¹ふるさと¹² 洗民への思慕と同質のものになって行ったと思われる。

*

啄木日記における、智恵子に関するその後の記述を追ってみる。札幌へ行っての日記、

九月十八日 秋雨

函館なる橘智恵子女史外弥生の女教員宛に手紙をかけり、

とある。また東京時代に書いた「創作ノート」にも、このころの智恵子を思う断片の記述がローマ字で記されている。

懐しい智恵子さん、別れて来て私のまず第一に感じたことは、私たち二人がこの二か月の間に何も別段の話をしなかったにかかわらず、どれだけ互いは慰められていたかということです。今夜小樽に着いてこの宿屋に泊りましたが、私は何だか大切なものを札幌に忘れて来たような気持で……

とある。「小樽」を「札幌」に、「札幌」を「函館」に改めれば、啄木の智恵子に寄せる思慕と哀感が切実に伝わってくる。

九月十八日付の智恵子宛の手紙は現存していないようであるが、先の断片は、内容から考えても、函館での二か月余の弥生尋常小学校での啄木の智恵子に対する思いといつてよいもので、それが実感として伝わってくる文面となっている。

その後啄木は、小樽日報（明40・10・2～12・21）・釧路新聞（明41・1・9～4・5）と転々とし、海路上京のため函館に寄る。この間の日記には橘智恵子の名は見えない。

明治四十一年四月十日の日記に、

三時頃出て、途中で弥生学校の遠山、日向操の二女史に逢ふ。其足で弥生校を訪問して高橋すゑ、森山けんの二女史を見た。

とある。橘智恵子の名は見えない。一番会いたかったであろう智恵子には会えなかったものと思われる。会えなかったということ、思いはますます深くなる。

その後の日記にも、明治四十二年一月五日まで智恵子の名は一切見ることができない。不思議なことではあるが、その間の啄木の現実逃避的生活は俗の中の俗の方向へと触手を延ばして行ったように思う。

啄木は函館（明41・4・7～4・13）から小樽（明41・4・14～4・19）へ妻子を迎えに行き、妻節子・娘京子・母カツを伴って再び函館に帰る。そして、三人を友人宮崎郁雨に托して単身上京するのである。

四月二十四日

老母と妻と子と函館に帰ったノ友の厚き情は謝する辞もない。自分が新たに築くべき創作的生活には希望がある。否、これ以外に自分の前途何事も無いノそして唯涙が、噫、所詮自分、石川啄木は、何如に此世に処すべきかを知らぬのだ。

犬コロの如く丸くなつて三等室に寝たノ！

とある。「創作的生活」「これ以外に自分の前途何事も無い」との決意で上京したものの、自分の思い通りに行か

ないのが世間である。金田一京助の好意で一時同宿し、小説を懸命に執筆するが、一向に買い手はつかない。生活は行きづまり、無収入のうちに焦燥と苦悩の日々を送るだけである。函館の宮崎郁雨に預けた妻子・母など到底東京に呼び寄せられる状態ではない。そのような中であって、現実逃避の対象として植木貞子との愛人関係が生じたり、浅草の巷を彷徨して商売女たちと一夜を共にしたりで、ずさんだ生活が続くようになる。

*

生活を一新させようと九月六日、蓋平館別荘に移り住むこととなる。この頃から新聞小説「鳥影」（東京朝日新聞）の連載が始まったり、雑誌「スバル」創刊の準備に入ったりで、多少の希望は見えはじめる。東京に出て半年後のことである。この頃から橘智恵子の名が再び日記に見えはじめる。

明治四十二年一月五日 晴、温

今日はよい日であった。

白杵の平山良子から手紙、スバル半ヶ年分前金と、“佐保姫”代金二円三十二銭為替でよこした。畠山享君からも封書。

モ一通の封書は札幌なる橘智恵子さんからであった。函館時代こひしく谷地頭なつかしくとかいてある。げになつかしいたよりではあつた。遠山女子樺太にゆき、日向女史出産、高橋すゑ子（嘗て中学生と噂あつてやめたといふ）が森の学校に赴任したことなどを初めて知つた。

とある。本当に久し振りの智恵子からの手紙であつたのだらう。明治四十一年日誌「清盟帖」（明治四十一年一月賀状ヲ交換シタル知人の住所姓名録。及び其後の知人）の中に「橘智恵子氏 函館区弥生小学校〔抹消〕

〔札幌郡札幌村〕十四 〕

として橋智恵子の名が見えることから、この明治四十二年の正月にも、賀状としてさし出したその返事ともいうべき、懐しい手紙であったと思われる。これを契機とするかのように、智恵子の名前が、日記にしばしば登場してくる。

◎正午から智恵子さんへ手紙をかき出した。

(明治42・1・6の日記)

◎橋智恵子の母上からハガキ、急性肋膜炎で入院してゐられるとのこと、少し軽快とのこと。

(明治42・2・10の日記)

◎午前にも木浦の八重樫君と智恵子さんへ手紙、

(明治42・3・7の日記)

◎札幌の橋智恵子さんから、病気がなおって先月二十六日に退院したという葉書がきた。

(明治42・4・7のローマ字日記)

◎桜は九分咲き。暖かな、おだやかな、全く春らしい日で、空は遠く花曇りにかすんだ。

おととい来た時は何とも思わなかった智恵子さんの葉書を見てみると、なぜかたまらないほど恋しくなってきた。「人の妻にならぬ前に、たった一度でいいから会いたい！」そう思った。

智恵子さん！ なんといい名前だろう！ あのしとやかな、そして軽やかな、いかにも若い女らしい歩きぶり！ さわやかな声！ 二人の話したのはたった二度だ。一度は大竹校長の家で、予が解職願いを持って行った時、一度は谷地頭の、あのエビ色の窓かけのかかった窓のある部屋で——そうだ、予が『あこがれ』を持って行った時だ。どちらも函館のことだ。

ああ！ 別れてからも二十カ月になる！

(明治42・4・9のローマ字日記)

この日記は、函館を去ろうとして智恵子と会った明治四十年九月十一日・十二日の出来事を髣髴させるものがあ

り、優しく懐しくしみじみとした思い出となって啄木の心を抱えているのである。否、思い出というより、より一層強い思慕の情となって啄木の心に巣くっているのである。啄木の思いに答えるかのように、智恵子からも長い手紙が啄木の元に届く。

明治四十二年四月二十四日 土曜日日記、

少し遅くなって帰った。机の上には原稿紙の上に手紙らしいもの——胸を躍らして電燈のネジをひねると、それは札幌の橘智恵子さんから——！ 退院の知らせの葉書をもらってから予はまだ返事をださずにいたのだ。

「函館にてお目にかかりしは僅かの間に候いしがお忘れもなくお手紙……お嬉しく——と書いてある。」「この頃は外を散歩する位に相成り候」と書いてある。「昔偲ばれ候」と書いてある。そして、「お暇あらば葉書なりとも——」と書いてある。

この日の手紙を受け取った啄木の思いについては、もはや解説するまでもないであろう。「路問ふほど」の、ごく短い期間であったにもかかわらず、その短かかった故にであろうか、一度こころの奥底に刻印された人は「忘れ得ぬ人」となって、ふと、こころの中の主役として現われてくるのである。「忘れればよつとした事が思出の種にまたなる忘れかねつ」とあるが、まさに啄木にとつての橘智恵子は、真の意味での「忘れかねつ」る人となつたのである。

*

現在、啄木の智恵子宛書簡は二通残っている。一通は明治四十二年六月二日付、一通は明治四十三年十二月二十四日付の書簡である。

退院のお知らせの御葉書についての何日ぞやのお手紙、お喜びも申上げずに日夕を過し候ふうちに胃腸を害

して恰度四週間の病院生活を致し、一昨日退院致候、東京は最早スツカリ夏、退院した晩ウツカリして寝冷えをして昨日今日風邪の気味、身心の衰弱にポーツとした頭は、しきりに過ぎし日など思浮べ候、御身は最早や全く健康を恢復せられ候や

(明42・6・2 本郷より橘智恵子宛書簡)

という文面である。「しきりに過ぎし日など思浮べ」と精神が消極的・懐古的になつてしまつてゐるのである。「身心の衰弱」ゆえであらうが、こういう時にこそ、ここから安心できる場所・安心できる人が恋しく慕わしくなつてくるのであるが、啄木も例外ではない。病氣であつた智恵子と病氣となつた啄木のこころの通い合いが、はつきりと見てとれる書簡である。

もう一通は、歌集『一握の砂』出版後の書簡である。

心ならぬ御無沙汰のうちにこの年も暮れむといたし候、雪なくてさびしき都の冬は夢北に飛ぶ夜頃多く候、数日前歌集一部お送りいたせし筈に候ひしが御落手下され候や、否や、そのうちの或るところに収めし二十幾首、君もそれとは心付給ひつらむ、塵埃の中さすらふ者のはかなき心なぐさみをあはれとおぼし下され度し、おん身にはその後いかゞお過し遊ばされ候ひしぞあと七日にて大晦日といふ日の夜

(明43・12・24 本郷より橘智恵子宛書簡)

というものである。「歌集一部」とあるのは『一握の砂』(明43・12・1)のことであり、「或るところに収めし二十幾首」というのは、集中「忘れがたき人人」の「二」に収められている、橘智恵子を歌つた一連の歌である。冒頭に掲げた「路問ふほどのこと」十六首に加えて、次の六首が載せられている。

かの時に言ひそびれたる大切の言葉は今も胸にのこれど

函館のかの焼跡を去りし夜のこころ残りを今も残しつ

人がいふ鬢のほつれのためでたさを物書く時の君に見たりし

病むと聞き癒えしと聞きて四百里のこなたに我はうつなかりし

かの聲を最一度聴かばすつきりと胸や霽^はれむと今朝も思へる

わかれ来て年を重ねて年ごとに恋しくなれる君にしあるかな

以上の二十二首が、橘智恵子を詠んだ歌として、私の眼前にある。

日記・書簡を通して、智恵子との出会いと別れを思いみると、これら啄木の歌った一首一首の歌は、二年余の歲月の中で胸中深く育って行った橘智恵子への切実なる思慕以外の何者でもない。私は強く確信する。

*

大麥克明に日記をつけていた啄木の日記に空白の時期がある。明治四十二年六月十七日から明治四十三年十二月末まで（ただし、明治四十三年四月の日記だけはある）である。この時期は、家族の上京と『一握の砂』編集・出版の時期とほぼ重なる。これらの時期の出来事については書簡等で確認する以外に今は方法がない。この時期は、妻節子の家出、新聞校正係としての勤務、歌集原稿の整理、大逆事件、朝日歌壇選者等、身心共に多忙な毎日であり、それに加えて妻節子の懐妊等、啄木にとって、独りになることのできない精神的困憊の時期でもあった。

そして、『文章世界』（明43・11・1）に掲載された「路問ふほどのこと」が歌われたのは、まさに長男真一誕生の直前という時であり、出産のための金策、妻に何もしてやれないという自責の念、不安と期待と焦燥の妙に入り混った、精神的空白の時だったのではなからうか。ふと口をついて出たような、「山の子の山を思ふがごとくにもかなしき時は君を思へり」の歌は、まさしく、苦く辛い現実から逃れんとして逃れ得ない啄木のこころの安らぎを求める歌であり、別れて二年余の間に啄木のこころの中で成長して行った「ふるさと智恵子」を思慕する安らぎへ

の希求であつた。実に短い時間の出会いと別れ、いわば「路問ふほど」の行きずりの人と時間とその会話、啄木のころの込めた言葉も、単なる挨拶と受け取つたであらう智恵子、しかし、啄木にとって、苦境に立ち現実生活で追いつめられるに従つて鮮明に脳裏に浮上してくるのは智恵子だったのである。そう考えると「わかれ来て年を重ねて年ごとに恋しくなれる君にしあるかな」の歌は、まさに啄木の実感の籠つた歌だと言つてよい。

*

啄木は浪漫的歌人であつても厭世的歌人では決してない。彼のころは、思い通りにならない現実の悲しみ苦しみで満ち溢れ、このことよつて心情は大きく揺れ動く。その心情を忠実に写そうとすると同時に「なつかしいもの」を希求する。これが啄木の詩人的歌人的資質である。ある時は現実を見すえ、ある時は天上を見ようとするが、それはどちらも啄木のころである。現実の苦悩が大きければ大きいほど、現実の生活が貧しければ貧しいほど、啄木は「ふるさと」「すぎし日々」に思いを寄せて行くのである。妻の出産直前に橘智恵子への切なる思いを歌うことは、啄木にとって矛盾でも何でもない。道徳的・倫理的に考えれば、不謹慎かつ自己本位的に見えるかも知れないが、啄木にとっては忠実なるころの動きだったのである。智恵子という人の上に「ふるさと」的なものを見ようとすることは、啄木にとって、現実生活におけるころのバランス作用だつたと私には思える。

啄木の歌には、現実の貧しく苦しい生活にあつて、そこから目をそらせて「ふるさと」的なものへ回帰して行く歌と、そういった苦しい現実をじつと見つめる歌とがあり、それが同時に成立している。「東京」という現実と「ふるさと」という「なつかしさ」を同時に歌っている。「路問ふほどのこと」の歌人は、このような詩人的・歌人的資質をもつていたのである。このような意味からすれば「路問ふほどのこと」一連の歌は、啄木のころの自然の発露の歌だったのである。